

新十津川町開拓記念館 展示品紹介

8月15日は、終戦記念日です。本町の歴史を伝える開拓記念館には、戦争に関する史料が展示されています。今号では昭和14年に起こったノモンハン事件に関連する史料を紹介します。

【戦死した弟に送った文章】

昭和14年8月29日に戦死した弟、三田村田郎氏（享年23歳）の一周忌に、姉、三田村ふみ氏が送った文章です。弟への慈しみが感じられますが、決して弱みや悲しみを言葉に出さない、重みのある文章です。



弟 田郎の一周忌

北海道樺戸郡新十津川村
姉 三田村ふみ

忘れもせぬ昭和十三年二月一日

旭川第二十七聯隊（※1）に入營直ちに十五日出征である、瀧川駅通過の報で取るものも取敢へず見送ったのは夜の六時〇分、初の軍服姿、旋に従って素直に車中から首さへ出さず唯嬉しいやら、懐かしいやらで踊る心を顔全体で現はして、早口に見送って下さる方々に別れの言葉も忙しく：かくして三十分の停車も短いものであった、後輩の中學生（※2）の校歌・拍子・檄：など餘りにもはでな門出であった、
発車のベル：「萬歳！」「萬歳！」「さようなら！ しっかりやって来て…」

「姉さん！ お母様頼みますよ」

まさか、これが此の世の別れの言葉にならうとは露知らず、

田郎は女五人姉妹の一番末に男として生れ、八才にして父を失ひ、二十三才のその日まで女手で専門学校（※3）まで育て上げられ、今の今まで母や姉の有難さをかくまでに感じてゐなかつたであらうに、（中略）

嫩江（※4）入隊以後も一度も苦しむこと、つらいことごぼして来た事

はない、寒い冬、暑い夏も過ぎて一息せんとする時、動員の命を受けたとの報：でも何時出勤することやら兵卒には知る間もないか 故郷の私共には唯々神佛に念じてこれ三生よく病に丈は負けぬ様に：あ：思い出すさへ感激の夜、村祭りの宵祭、午後七時：役場の兵事係来宅

でも、何も言われぬ只世間話時経て形を改め「：実は 田郎さんが今度 名譽の御戦死をなさいました：」と公電を出される、私共餘りの事に涙も出ぬ、まだ出動したかさへ知らぬ

私共であつたのに：でも：

「田ちゃん、よくやってくれたね、御奉公が出来て： さぞご先祖も父上も御満足なさつてゐることですう：」

生を得て二十四年、入隊僅か九ヶ月、一等兵になり、飯上當番もせずともよくなったと知らせて来て二ヶ月足らずで：

母は士族の家を立派についでくれたと申て嬉し泣き。色々と身に餘る遺族への御待遇や御同情、唯々感謝、感激の外はない、私共は嬉し泣きであつた。

遺骨も十一月廿日到着、盛大なる村葬が行われた、かくしてそれから早一年は夢の様。

只有し日の思ひを浮かべて今日の日になった。

田原隊長（※5）殿は御戦傷にも拘わらず、一周忌に當り御慰問や御供物を御贈呈、又、わざわざ思ひ出の旭川で御法要を催され、遺族の私共に、手厚く戦況を報告され、今更乍ら隊長殿の御厚情に感謝したのであつた。

※1 旭川第7師団歩兵第27連隊第3大隊第9中隊に所属していた。

※2 昭和10年3月 瀧川中学校（現道立滝川工業高校）卒業

※3 昭和10年4月 明治大学専門部商科入学。同窓生に村山富市氏、丸谷金保氏

※4 のんこう。アムール川流域の都市。日本陸軍の駐屯地があつた。

※5 第3大隊を指揮した田原恒春少佐

○三田村田郎氏略歴

大正五年二月九日 新十津川村に出生

昭和十年三月 瀧川中学校（現道立滝川工業高校）卒業

昭和十一年四月 明治大学専門部商科入学

昭和十三年十二月十日 在学中に入

營

昭和十四年八月二十九日 ノモンハンにて戦死

所属・階級 第7師団(旭川) 歩兵
第27連隊(連隊長 三宮満治大佐)
第3大隊(大隊長 田原恒春少佐)
第9中隊(中隊長 永瀬源三中尉)
指揮班 1等兵(戦死後 上等兵)



三田村 田郎 氏

「ノモンハン事件とは」

満州国とモンゴル国境で、起こった国境紛争。両国の後ろ盾であった日ソ両軍の事実上の国家戦争でした。
日時 1939(昭和14)年5月11日～9月16日

戦力 日本軍5万8925人

ソ連・モンゴル連合軍約23万人

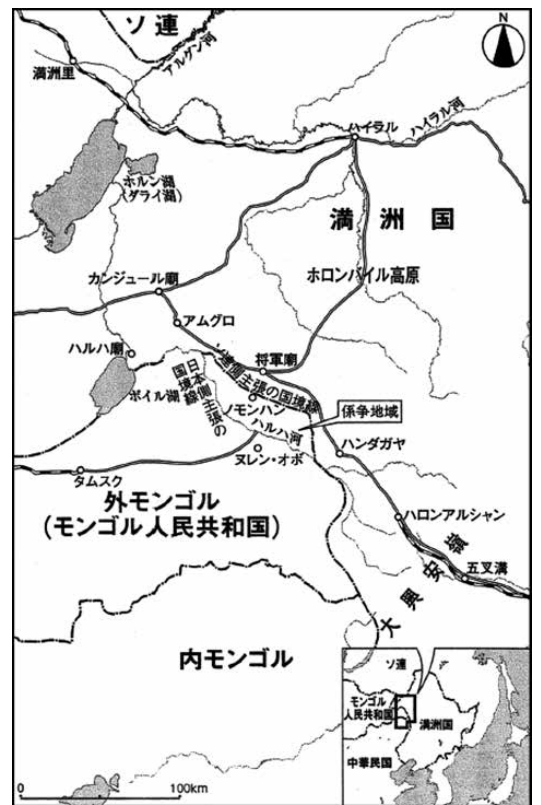
死傷者 日本軍1万8979人

ソ連・モンゴル連合軍約2万6645人

勝敗 引き分け

〇どのような戦闘に参加したのか①

『七師団戦記 ノモンハンの死闘』(北海タイムズ 昭和40年)から「剣道4段の永瀬中尉は名刀祐定を



ノモンハン周辺図

抜いて突っ走る。その時戦車の猛襲。中尉はその1台に飛び乗り砲塔の天ガイをこじあけて乗員を突き刺した。戦車は沈黙した。続いてまた1台。あれもやっつけてやれ。―さらに横に回って飛び掛かったとたん、飛んできたソ連弾を受け、軍刀を持ったまま転げ落ちて動かなくなった。(中略)

死体収用の時の哀れをさそったのは、どの戦死体の雑のうからも当時5銭で買った羊かんが出てきたことだ。別命あるまで食べるなど命令されていたため、ひもじくても我慢して死んでいったのだらう。死体収容にいった将兵はみんな泣いた。」

〇どのような戦闘に参加したのか②

『昭和史の謎を追う(上)』(秦郁彦 著 平成11年)から

「21歳の福原一等兵が第9中隊(永瀬中尉)の一員として、ソ連軍戦車と格闘したのは、8月29日の夜明けごろである。身を隠す防護物とてない一望の大草原、戦友は次々と倒れ、永瀬中隊長は敵戦車に飛び乗って天蓋をこじ開けようとしているところを、横合いから打たれて死んだ。虫の息になって横たわっている富山分隊長が『救援!』と命じたので、福原は弾雨をかいくぐって戦場を離脱、4キロ後方の連帯本部にたどり着いた。三宮満治連隊長の前へ出て中隊の惨状を報告、救援を訴えると、意外にも連隊長は『9中隊が全滅などとウソを言うな。お前は前線から逃げて来たのだらう。帰れ』と大喝した。」

この要因として、三宮連隊長と田

原大隊長のそりが合わなかったので冷酷な態度を取ったと記述している。

〇三田村氏の戦闘経緯

8月28日

22時 田原大隊集結。出発前に目印のヤナギの枝を見失い出発を遅らせる大隊に、三宮連隊長が「ようゆかんのか!」と怒鳴る。これに対し、田春少佐が勸をたよりに出発。

8月29日

5時頃 先遣隊である第九中隊1個小隊がソ連軍に囲まれる。これを救出するために第9中隊出動、同様にソ連軍に囲まれる。

6時頃

中隊長戦死、中隊ほぼ全滅

11時30分

三田村田郎氏砲弾断片を腹に受け戦死。

〇戦争と新十津川

大正14年から、新十津川村全男子は尚武会会員となりました。すなわち剣道が必修となり、徴兵制が敷かれた昭和20年以前において、新十津川出身の兵隊は剣士として重宝され、また重責を担いました。

三田村氏の軍隊手帳にも、「昭和14年1月21日実施ノ第7師団剣術競技会ニ参加ヲ命ス」とあります。また三田村氏とは別の方ですが、台湾で憲兵として終戦を迎えた新十津川出身の方も剣術競技会に参加しています。

この要因として、三宮連隊長と田